

余市の人々。 第6回 【江部拓弥】

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！

塩田さんの話は、あけすけだ。ほんの数十分前のこと、会った瞬間に、なんでも訊いてください、塩田さんはそう言った。その言葉に嘘はないんだなあと思う。だって塩田さん、ひと通り話し終えると、僕に向かって、ほかに訊きたいことはないですか、なんでもどうぞと、改めて質問を促してくる。実際、塩田屋の売り上げはどう推移しているのだろうか。本は本当に売れなくなっているのかな。地方の町の本屋さんではどんな本が売れるんだろう。率直に訊きたいことを口にす

る。
「隠す話じゃない。小さな町の小さな本屋の現状だからね。うちは書籍の売り上げはそれほど減ってないです。雑誌はぐ〜んと落ちましたね。『少年ジャンプ』が1週間で200冊以上も売れたことがあったけど、いまは10冊くらいかな。情報誌は飽きられちゃったのか、顕著に売り上げが落ちてますね。余市だからって売れる本はないんですよ。お客さんが求める本はどこにいてもたいして変わらない。だからベストセラーが入ってこないのは、それなりにきつい。でもね、われわれは雑誌を売らないと商売にならない。雑誌は定期的に買ってもらえるでしょ。それがコロナの影響で、

病院や銀行が定期購読をストップしちゃったりしている。そういう意味では、しんどい。書店は納品された本の7割か8割を売って、初めて利益が出るんです。7割は嘘だな、8割だね。売れないねー、最近はいや、最近どころじゃない。もうずっとだ」

景気のいい話をしているわけじゃないのに、塩田さんはなぜか明るい。そのことが、ちょっと嬉しい。そう伝えると「景気のいい頃もあったんだから、そんなときだけいい顔して、悪いからって暗い顔してるのは性に合わないだけ」と、やっぱり前向きな嬉しい答えが返ってくる。塩田さんは元気だ。

「もともとは365日、休まずに営業してたからね。正月くらい休んでいいだろうと思っても、シャッターどんどんって叩かれて、開けてくれて客がくる。うちは文房具もやってるからね、お年玉袋が足りないとか結構あった。そうすると、正月に読む本をついでに買っていこうかと本も売れる。そういうことはもうないなあ。コンビニもあるからさ。いまは日曜休み。そもそも日曜日、この辺は年寄りしかいない。私がいちばん若いくらいだよ」(続く)

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥(えべたくや)さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「WE B本の雑誌。」(<https://www.webdoku.jp/column/ebe/>)に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020.8.31

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117

よいち水産品セール

余市商工会議所水産部会主催による水産加工品の販売を実施します。販売店・販売品目・連絡先などの詳細は12月5日(日)新聞折込チラシをご覧ください。

販売期間 12月9日(木)、10日(金)

販売方法 販売店へ直接電話注文 ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため

おみやげ・おくりものには余市の名産品を！

12月1日から12月31日は「よいち名産品愛護月間」です。

「よいち名産品愛護月間」とは、町内で生産される名産品を、住民の皆さんに積極的に関心をもっていただき、名産品の愛用意識の高揚と需要の拡大を図るものです。

問合せ 余市商工会議所 ☎23-2116

余市町LINE公式アカウント

ソーシャルネットワーキングサービス「LINE」の余市町公式アカウントより、災害時の緊急情報や防災情報などを発信しています。是非、ご活用ください！



▲登録はコチラ

問合せ 地域協働推進課 広報広聴グループ
☎21-2142